

絶対平和主義（2）

—— 非暴力を実践した人々 ——

Overview

- 近現代における平和主義の実践者たち
 - ガンジー、キング、内村鑑三、賀川豊彦、柳宗悦
- 名もなき平和主義者たち
 - アナバプテスト、アーミッシュ、クエーカー、ドゥホポール



マハトマ・ガンディー（1869～1948）

- 1893年、訴訟事件の依頼で南アフリカに渡る。そこに働くインド人年季契約労働者の市民権獲得闘争を指導することとなり、自ら「サティヤーグラハ」（真理の把捉）と名付ける大衆的非暴力抵抗運動を成功に導く。
- 1915年、インドに戻る。
- 1917年、ビハール州チャンパーラン県でのインディゴ(藍)小作争議、翌年グジャラート州アフマダーバードの繊維労働者の争議を「アヒンサー」（非暴力）の原則を貫徹して解決。
- 1930年、イギリス行政の象徴である塩税の侵犯（塩の行進）に始まる第2次サティヤーグラハ闘争を指導。
- 1948年、狂信的ヒンドゥー主義者の手によって暗殺。

マーティン・ルーサー・キング (1929～1968)

- 1955年、モンゴメリーのバス・ボイコット運動を指導。56年、連邦最高裁判所が公共輸送機関での人種差別を禁じる。以降、南部キリスト教指導者会議(SCLC)を組織、非暴力運動を推進する。
- 1959年、インドをおとずれ、ガンディーが追求した大衆の非暴力抵抗運動をより深く理解する。
- 1963年、ワシントン大行進「私には夢がある。いつかジョージアの赤い丘で奴隷の子孫と奴隷所有者の子孫が兄弟として同じテーブルにつく夢が」
- 1964年、ノーベル平和賞受賞。
- 1968年、暗殺される。

(比較) マルコム X (1925-1965)

- キング牧師らの非暴力主義による黒人運動に反対し、暴力による権利獲得をめざした。
- 1946年、強盗罪で刑務所におくられたマルコムは、服役中、ネーション・オブ・イスラムの教えに触れる。
- 1960年代初頭、ネーション・オブ・イスラムのもっとも有名なスポークスマンとなる。
- 1964年、ネーション・オブ・イスラムを脱退。メッカを巡礼。
- 1965年、暗殺される。



内村鑑三 (1861～1930)

- 日清戦争のときには、それを「義戦」と見なす主戦論者であった。また、キリスト教は明治政府の近代化政策を補完する役割を果たすことができると考えていた。
- しかし、戦争に勝った結果、日本の植民地主義政策の中に内村が見たのは、利権を拡大しようとする帝国主義的拡張政策であった。つまり、義戦ではなく単なる侵略戦争に過ぎなかった実態を知ることによって、彼の戦争に対する理解は大きく転換し、新約聖書の思想やクェーカーの思想の影響を受けて、**非戦論者**としての立場を明確にしていく。

内村の非戦論 (1)

「若し戦争はより小さな悪事であって世には戦争に勝る悪事があると称へる人がありますならば其人は自分で何を日ふて居るのかを知らない人であると思います、戦争よりも大なる悪事は何でありますか、.....悪しき手段を以て善き目的に達することは出来ません、.....平和は決して否な決して戦争を透うして来りません、平和は戦争を廃して来ります、.....」(内村鑑三『非戦論』岩波書店、1990年、63-64頁)。

内村の非戦論（2）

「非現実的なまぼろしにすぎない」とあなたがたはいうだろう。しかし、あなたがたのいう武装した文明というのは、現実的であったか。自らその非現実性を証明したのではなかったか。むしろ、武装しない平和こそ、唯一可能な平和ではないのか。……ああ、私の愛する祖国は、その未経験な明治時代の政治家の指導のもとで、この文明とはいえ西洋文明を、そっくりそのまま受け入れてしまったのだ！」（A New Civilization, The Japan Christian Intelligencer, 1926.4.5）

アジア・太平洋戦争期における 無教会の中の葛藤と対立

- 黒崎幸吉（1886-1970）
 - 非戦論を貫く。聖書の注解書を著す（直解主義的な解釈）。
- 塚本虎二（1885-1973）
 - 非戦論から戦争容認へ。「大東亜戦争」を「聖戦」として肯定。戦後は絶対平和主義を主張。
- 矢内原忠雄（1893-1961）
 - 戦争批判を貫く。天皇への熱烈な親愛。天皇を平和主義者として理解する。

その他の日本の平和主義者たち



賀川豊彦（1888-1960）



柳宗悦（1889-1961）



高木顕明（1864-1914）

名もなき平和主義者たち



アナバプテスト

宗教改革の時代に、幼児洗礼および教会と国家の結びつきを認めず（カトリックとプロテスタントはいずれも認めていた）、使徒たちの時代の教会に立ち返ろうとした。本人の自覚に基づいた洗礼を重視し、相互に洗礼を受け合った彼らは「アナバプテスト」（再洗礼派）と呼ばれ、激しい迫害を受けた。このアナバプテストの考えを継承するグループの中で、メノー・シモンズを指導者として形成されていった一派がメノナイトである。

アーミッシュ

メノナイトから分派したグループにアーミッシュがある。アーミッシュは、現在では米国とカナダのオンタリオ州にだけに居住する少数派であるが、アーミッシュの人々は自給自足の生活を営み、電気や近代的な機械などを使わないことで知られている。アーミッシュと同じ生活をするにはできないにしても、便利さが人々を悪へと誘い、生活を退廃させるというアーミッシュの信仰的洞察には、多くの学ぶべき点がある。

クエーカー

メノナイトやアーミッシュのようなアナバプテストの流れを汲む教派以外にも、絶対平和主義の教派がある。その一つはクエーカー（フレンド派、キリスト友会）である。17世紀の英国で、ジョージ・フォックスによって始められたこの教派は、教義にこだわることをせず、むしろ、あらゆる人に内在すると言われる「内なる光」に大きな関心を寄せる。宣誓を拒否し（マタイ5章34節）、戦争に反対する（マタイ5章39節）伝統の中で、教会や国家の権威を否定することもあった。日本にはクエーカーは1886年に伝えられた。クエーカー信徒の著名人としては新渡戸稲造がいる。

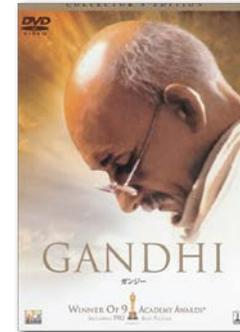
ドゥホボール

日本ではほとんど知られていない絶対平和主義の教派として、ドゥホボールがある。ドゥホボールの起源はまだよくわかっていない。ドゥホボールは19世紀末、ロシアのカフカスで銃からナイフに至るまで、一切の武器を焼き捨て、徴兵に応じようとしなかった。そうした信念のゆえに数々の迫害を受けることになるが、そのドゥホボールの末裔が今もカナダで先祖たちの教えを守っている。

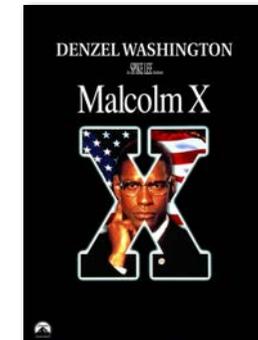
【参考文献】

- 上坂昇 『キング牧師とマルコムX』 講談社、1994年（講談社現代新書）。
- 内村鑑三 『非戦論』（内村鑑三選集2）岩波書店、1990年。
- ドナルド・B. クレイビルほか 『アーミッシュの赦し——なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』 亜紀書房、2008年。
- 中村喜和 『武器を焼け——ロシアの平和主義者たちの軌跡』 山川出版社、2002年。
- 中見真理 『柳 宗悦——「複合の美」の思想』 岩波書店、2013年（岩波新書）。

【参考映画】



「ガンジー」（1982年）



「マルコムX」（1993年）